日本経済新聞　2019年（令和元年）10月24日（木曜日）

空き家再生でまちづくり

さいたま市岩槻区

専門家・起業希望者らで議論

中心地のにぎわい創出

さいたま市岩槻区は、中心部の再活性化を狙い、空き店舗や空き家を再生して活用する「リノベーションまちづくり」を進める。専門家や起業希望者を募って有効的な方法を議論。収益性が維持できる計画を立案し、所有者や住民にプレゼンテーションした上で、事業化に結びつける。少子高齢化が進む中、まちのにぎわいを取り戻すことで、改めて子育て世代の流入や雇用創出を促す。

専門家、起業希望者の議論の場となる「リノベーションスクール」を来年2月28日から3月1日までの3日間、開催する。具体的な対象物件は現時点で未定だが、岩槻駅東口の2つの空き家や空き店舗の活用方法を探る予定だ。

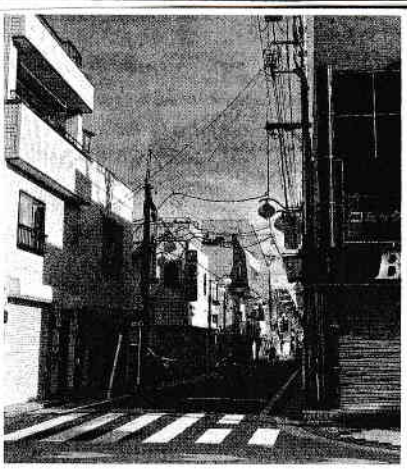
参加者は物件のまわりを実際に歩いたり住民から話を聞いたりして、地域特有の課題を見つけて計画づくりに生かす。参加者は市内外から募り、1物件あたり8人程度で計画を練る。

同区は21日、「リノベーションまちづくり」の住民理解を深めるため、講演会も実施した。約150人が参加し、全国で遊休不動産を活用したまちづくりに先駆的に取り組んできた清水義次氏らと共に、地域資源を活用しながらエリア価値を高める方法などを議論した。清水氏は「熱意ある不動産オーナーに手を上げてほしい」と呼びかけた。11月、12月にも同様のイベントを企画している。

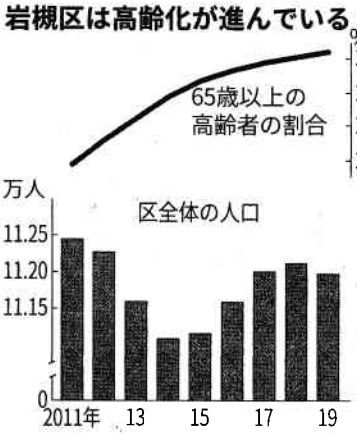
岩槻区はさいたま市全10区のうち唯一、高齢化率が3割を超えている。10月時点で人口に占める65歳以上の割合は30・3%。都心へのアクセス性で他区に劣る岩槻駅周辺は、若者世代の流出も多く、近年、空き物件が目立っている。

人形づくりのまちとして知られた同地区では、来年2月、人形博物館が開館する予定。隣接地には区の情報を発信する交流館も開業し、観光客を呼び込むきっかけになると期待されているが、周辺に魅力的な店舗が乏しければ、地域全体の活性化にはつながりにくい。人形博物館の開館と併せて中心市街地のリノベーションを進め、観光客増にも力を入れたい考えだ。

空き店舗、空き家を再生して活用する取り組みは、県内では草加市が2016年にスクールを開催。これまで3回のスクールを実施し、草加駅東口を中心に7物件が事業化された。座敷を用意して子どもと一緒に食事を楽しめる洋食屋や、子連れで働くことができるシェアアトリエなどが開業した。不動産オーナーや創業者らによる独自のリノベーションの動きも広がり始めている。



岩槻駅東口ではシャッターが閉まった店舗が並ぶ商店街もある



（注）10月時点
（出所）さいたま市